各地で話題の病害虫

スターチス萎ちょう細菌病

学名：*Pseudomonas caryophylli* Starr et Burkholder
英名：Bacterial wilt of statice

昭和60年、高知県において8～9月ごろスターチスの下葉から黄化して萎ちょう枯死する症状が発生し問題となった。高知県農林技術研究所及び農業環境技術研究所などが病原菌を分離・同定した結果、*Pseudomonas caryophlli*によるスターチスの新病害であることが判り、病名は「スターチス萎ちょう細菌病」と命名された。

高知県農林水産部農業技術課　小林達男氏提供

本菌はスターチスのほかカーネーション、宿根カスミソウも侵す。病徴ははじめ下葉の一部が生気を失い黄化して萎ちょうする。その後、葉身の主脈を境とした半葉が黄化し、一部の葉脈が赤変し、さらに症状が進むと黄化と葉脈の赤変は全体に及ぶ。このような症状は次第に上部の葉へと進み、ついには生長点も侵され株全体が枯死する。り病株の主根及び側根は黒変することが多く、これらの根の維管束部はあめ色から黒色に変色し、はげしく侵されると大部分の根が腐敗する。本病は土壌伝染性で地温の高い8～9月に定植すると、発病が多い傾向にある。

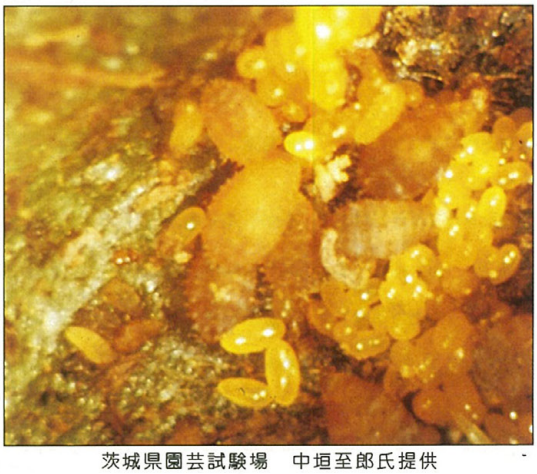
防除対策としては、苗床や栽培ほ場のクロルピクリン剤などによる土壌消毒が有効である。

クリイガアブラムシ

学名：*Horitziella castaneivora* Miyazaki

本虫は、ここ数年クリ栽培園での発生が多く、昨年は茨城県、石川県及び島根県で発生が特に多くみられた。

本虫はクリの毬果を吸汁加害する。花の時期に寄生された毬果は発育がとまり落下する。毬果の発育期に寄生されたものは、幼毬果のイガに亀裂を生じ、中の果実がみえるようになり正常に生育しない。



茨城県園芸試験場　中垣至郎氏提供

成虫はすべて無翅で幹母、幹雌、産性型、両性型（雄と雌）がある。体長1㎜の洋ナシ型で黄褐色から紫褐色で、体の表面に白い粉が付着する。背面には多数の乳頭状の突起がある。

茨城県においては、年間を通じてクリの樹肌で生息が確認される。5月上旬には、越冬した卵から幼虫がふ化し、樹肌を中心にして増殖する。開花期には幼虫が幼毬果へ移動し数世代を繰り返す。8月中旬には最盛期となり、樹間全体にほぼ均一に分布する。10月上旬まで発生が続き、樹皮の割れ目や着毬部付近の2年枝に越冬卵が産卵される。

防除は粘着テープなどの利用により、移動時期を把握して、幼虫の移動が最も盛んな７月中下旬にＰＡＰ乳剤などを散布するのが効果的である。また、５～６月にマシン油乳剤の樹間散布を試みて有効な結果が得られている。

キュウリ紫紋羽病

学名：*Helicobasidium mompa* Tanaka
英名：Violet root rot

昭和61年、青森県の一部の露地栽培キュウリに茎葉全体が萎ちょうし、後に黄化・枯死する病害が発生した。青森県畑作園芸試験場が病原菌を分離・同定した結果、本病は紫紋羽病菌によって起ることが判り、病名は“キュウリ紫紋羽病”と命名された。

青森県畑作園芸試験場　杉山　悟氏提供

本菌は寄主範囲が広く、畑作物や果樹類・花木類を被害残渣上の菌糸や土壌中の菌糸塊が伝染源となって、侵すことが知られている。

キュウリの病徴は、根の表面が束状あるいは膜状となった赤紫色の菌糸で覆われ、著しい被害根では皮層が完全に腐敗し菌糸束とともに容易にはがれ落ちる。根部の病徴の進展に伴って、地上部の葉は生気を失い、激しい場合には株全体が萎ちょうし、黄化・枯死する。

防除対策としては、紫紋羽病の一般的防除法である①本病の汚染地での栽培を避けること ②本菌の寄主ではないイネ科作物を一時的に栽培するか、あるいはクロルピクリンによる土壌消毒を行うことなどがあげられる。

ネ　ギ　コ　ガ

学名：*Acrolepiopsis sapporensis* Matsumura
英名：Allium leafminer

鹿児島県では、深ネギが水田転換作物として導入されて栽培面積が増加しているが、最近、本虫が発生し、ネギの品質を低下させて大きな問題となっている。

本虫はネギ類を加害し、幼虫はネギの葉肉内に潜入して食害するため小白点・蛇行状の白斑を生じる。発生が多いと斑紋が連続し、葉の全体が白化して枯死する。

鹿児島県農業試験場大隅支場　大矢慎吾氏提供

成虫は体長4.5㎜、翅の開張９㎜で、全体が灰黒色で前翅の後縁中央に白色斑があり、静止すると背面中央にこの白色斑が鮮やかに目立つ。卵は短楕円形で扁平、長径0.7㎜の乳白色である。幼虫は体長７～８㎜、全体が淡緑色で褐色の縞があり、体形は前後に細まり、紡錘形で胴部に細い毛を疎生する。老熟すると葉上に粗いレース状の繭を作り蛹化する。

本虫は非休眠性で周年にわたって発生し、年に９～10世代を繰り返す。冬期でも10℃を越える日には性フェロモントラップに誘殺される。成虫の発生は春と秋に多い傾向にある。

防除対策としては、現在のところ本虫を対象とした薬剤は無いが、ネギアザミウマやアブラムシを対象とした防除とかねて、幼虫の潜入防止に重点をおいた防除が効果的である。

農林水産省